

日本人の中国語「副詞」論に関する一考察

——日本文典からの影響を中心に——

盧 驍

A study on Japanese's recognition of Chinese "Adverbs"

—Focusing on the influence from Japanese grammar books—

LU Xiao

After the publication of Otsuki Fumihiko's "Shina bun" in 1877, Chinese grammar research in Japan turned to the study of colloquial grammar. Along with that, grammar books that theoretically organized and systematically summarized were published.

On the other hand, the introduction of Western linguistics into Japan has promoted the modernization of Japanese linguistics, and many Japanese grammar books influenced by Western grammar books also appeared. Japanese researchers have also introduced the research results and research methods of Japanese linguistics in the process of modernization into the study of spoken Chinese grammar.

This article examines the contents of the "Adverbs" in the Chinese spoken grammar books from the two aspects of the naming and the subclassification, to clarify how Japanese researchers describe the "Adverbs", and also to investigate the influence of the Japanese grammar books on the theory of "Adverbs" constructed by Japanese researchers.

Keywords: Adverbs; Chinese grammar books; Naming of adverb; Subclassification of adverb ; Japanese grammar books

1. はじめに

米国人在華宣教師 Tarlton Perry Crawford とその助手張儒珍によって執筆・刊行された中国語口語文法書『文学書官話』（1869）の日本伝来は、従来、文語を中心に据えた明治日本の中国語研究に新風を吹込んだ。大槻文彦が『文学書官話』（1869）に訓点を附し、和文の注解を与え、『支那文典』（1877）という題名で発行したことは日本における中国語口語文法研究の端緒を切り開いた。『支那文典』の刊行を皮切りに、口語研究の勢いが益々盛んになり、中国語の口語文法を研究内容とした著作物も陸續として世に問われた。

一方、洋学偏重の気風が高かった明治初期にあたっては、西洋語学の移入が日本語学の近代化を促進

し、言語における規則、法則の体系としての文法観に基づく方法論も広く受け入れられるようになった。その結実として現れたのは、全体の枠組を洋文典に拠った洋風日本文典の続出であった。日本における本格的な中国語口語文法の研究は、明治維新以降になってはじめて、近代言語学の洗礼を受けた日本人研究者によって開始されたので、日本語学の近代化の過程で実った研究成果と研究方法も彼等によって中国語文法論に引き入れられたのである。

『支那文典』を嚆矢とする中国語口語文法の著述における副詞論に、明治前期の日本文典との関連を色濃く現わしているところが少なからずある。故に本稿では、明治・大正期の日本に於いて刊行された中国語口語文法書群における副詞に関する記述に対して、名称と下位分類の二面から考察を行い、副詞が如何に論じられているかを明らかにすると同時に、日本人によって構築された副詞論に見られた日本文典からの影響を解明してみる。

2. 副詞の名称

中国語口語文法書群に於いて、副詞について述べるのに、下記のような名称が用いられている。

表1 日本人による中国語口語文法書における副詞の名称

書名	刊行年次	名称
支那文典（大槻本）	明治10年	副詞ノ一部、非否
支那文典（村上本）	明治26年	加重詞、副詞、折服詞
清語文典	明治38年	副詞
清語正規	明治39年	副詞
支那語文法	明治41年	副詞
最新言文一致支那語文典	大正元年	副詞
北京官話文法・詞編	大正8年	副詞
北京官話支那語文法	大正8年	副詞
支那語語法	大正10年	副形容詞、副動詞、打消言
支那語文法研究	大正11年	疎状詞

2.1 副詞

日本で刊行された中国語文法書の中で、「副詞」が見えている最初の著述は、大槻文彦の『支那文典』（1877）である。大槻は『文学書官話』における「加重言」、「随従言」、「示處言」といった品詞名に対して、「副詞ノ一部」を訳語として当てている。『文学書官話』では、この三つの品詞部門について、以下のような解釈がなされている。

表2 『文学書官話』における「加重言」、「随従言」、「示處言」の説明

項目	解釈	例文
加重言	加重一類的話就是、最、頂、更、點、些、極、好、甚、太、狠、得狠、越發。這樣的話是屬形容言、連數目言、隨從言、加重他的意思。	所羅門是最聰明的人、桃子是頂好的果子、中國人狠多、這科花比那科花少些、鳥飛的太快、這科樹長的慢得狠、姓王的是最有錢的人
随従言	随従言一類的話就是、才、先、就、再、早、晚、常常、永遠、忽然、現在、已經、然後、立刻、前、後、往上、往下、往前、往後、快、慢、緩、急、直、一直、必、必定、實在、真是、大約、許、這樣、怎麼、輕輕的、滿滿的、悄悄的、難、隨便、便意、背地裡。這樣的話都隨靠托言調理他的意思。	朋友才走了、先吃飯然後去念書、悄悄的送給他、這樣彈琴往上走
示處言	示處言一類的話就是裡、內、內裡、中、中間、外、上、下、周圍、前、後、從、直到這樣的話都是屬一個名頭而且顯出別的名頭的地處或是形勢的地處來。	海裡有魚、人向水中看、日光地外正是氣、山上出石頭、院子周圍要立牆、眼前有孩子、從黃縣直到濟南府都是平地

「加重言」と称するものには、「最」、「頂」、「更」、「点」、「些」、「極」、「好」、「甚」、「太」、「狠」、「越發」などの程度副詞以外、不定量詞の「点」、「些」も含まれている。「加重言」というのは明らかに、これらの語の程度を表す機能に主眼を置いた命名である。

「随従言」は定義通りに常に「靠托言」（動詞）に付随し、それを修飾する働きを持つものである。上表では、時間、頻度、様態などを表す副詞以外、方位詞の「前」、「後」、時間名詞の「現在」、指示代詞の「這樣」、疑問代詞の「怎麼」、そして「輕輕的」、「滿滿的」、「悄悄的」といった形容詞、「背地裡」のような方位フレーズ、「往上」、「往下」等の介詞フレーズも例に挙がっている。つまり、常に状語となって動詞を修飾するもの、或いは状語の一部となって動詞を修飾し得るものが一律に「随従言」に分類されている。しかしながら、機能の面では同じ働きをするものであっても、文成分としての機能と品詞としての機能との区別を明確に認識しないことは大きな問題であると言わなければならない。

「示處言」は文字通りに場所を示す言葉である。例語には、「裡」、「內」、「內裡」、「中」、「中間」、「外」、「上」、「下」、「周圍」、「前」、「後」といった方位詞もあれば、「從」、「直到」のような介詞も挙がっている。これも明らかに、機能偏重的な考えによる扱い方である。

『支那文典』（大槻本）では、以上の三種の品詞部門に対して、全て「副詞ノ一部」と和訳した上、簡単な注釈も施している。

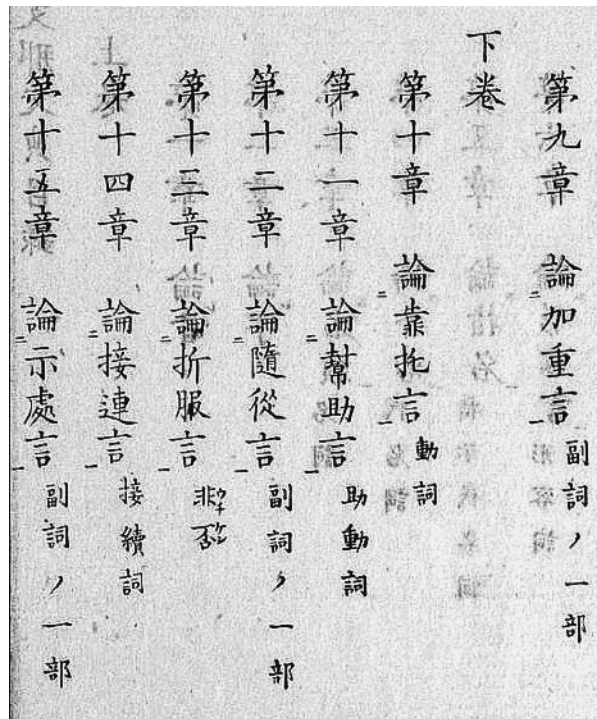


図1 「副詞ノ一部」と訳された品詞部門¹⁾

表3 『支那文典』(大槻本)における「加重言」、「隨從言」、「示處言」の注釈

項目	訳語	注釈
加重言	副詞ノ一部	洋語ニイフ副詞中ノ一部ニシテ特ニ形容言数日言隨從言二ノミ属スル者ナリ
隨從言	副詞ノ一部	此言ハ靠托言二ノミ隨從シテ其意味ヲ旁ヨリ調ヘ理ムル者ニシテ洋語ニイフ副詞ノ一部ノ動詞二ノミ副フモノナリ
示處言	副詞ノ一部	示處言ハ一個ノ名頭ニ属シテ且ツ別ノ名頭ノ地處ヲ顯ス言ナリ洋語ニハ副詞ノ一部ノ地處ヲ示ス者ナレド此ハ名頭ニ添ヒ彼ハ動詞ニ添フヲ異トス

「加重言」と「隨從言」をめぐる注解は、単に原書の定義を忠実に和訳したものである。「示處言」について、大槻は、中国語の「示處言」が名詞と結合して使うものに対して、洋語の副詞が動詞を修飾するものという独自の見解を付け加えている。

『文学書官話』のもう一つの訳本『支那文典』(村上本)では、先述の3項目に対して、以下のような訳語と注釈を与えている。

1) 大槻文彦. 『支那文典』乾卷. 大槻文彦. 1877. p2

表4 『支那文典』（村上本）における「加重言」、「随従言」、「示處言」の注釈

項目	訳語	注釈
加重言	加重詞	加重詞トハ形容詞、数目詞、副詞ニ属シテ他ノ意思ヲ加重スルモノ
随従言	副詞	副詞ハ就チ……ノ如キモノハ都テ動詞ニ随テ其意思ヲ調理ス之ヲ副詞ト称ス
示處言	示處詞	示處詞ハ都テ一個ノ名詞ニ属シ而シテ且ツ他ノ名詞ノ地處ヲ顯出シ或ハコノ形勢ノ地處ヲ顯出シ来ル

村上は「随従言」を「副詞」と訳しているが、「加重言」、「示處言」など原書に於いて「～言」で終わる品詞名を、「加重詞」、「示處詞」というように「～詞」に入れ替えただけで、其々に対する注釈も原書の定義に従っているものである。

ほかに、「副詞」について明確な定義を下したものに、『清語文典』、『支那語文法』、『最新言文一致支那語文典』、『北京官話文法・詞編』、『北京官話支那語文法』がある。

副詞とは動詞、形容詞に随属して、其意義を名状する者である²⁾。

副詞トハ動詞、形容詞及ヒ他ノ副詞ヲ形容スルモノナリ³⁾。

副詞トハ動詞又ハ形容詞ニ附随シテ、其ノ意味ヲヨク明カニスルモノヲ云ヒマス⁴⁾。

副詞トハ或動作、状態、性質ノ場所、時、方法、原因等ヲ示ス二用フル詞ナリ⁵⁾。

副詞トハ動詞又ハ形容詞ヲ形容スルモノヲ云フ⁶⁾。

以上の記述から、啊慶徒の『北京官話文法・詞編』だけ、副詞が示す種々の意味を基に定義を与えているが、ほかの著述は何れも文法機能から副詞を描いていることが分かる。

ところで、「副詞」という術語の使用状況を辿って調べると、その起源を江戸期の蘭語学文献に遡ることができる。古田（1957）の研究を踏まえれば、「副詞」という言葉は吉雄俊蔵の『六格前編』（1814）が最初である。本書では、蘭語の「bijwoorden」に対して当てた訳語は正に「副詞」である。ところが、杉本（1998）の指摘によると、吉雄俊蔵の師匠、吉雄権之助の『訳文必用属文錦囊』（1812）に「副詞」の名称は早くも見られたという⁷⁾。つまり、師匠の権之助が訳出した「副詞」という語は、弟子の俊蔵によって自著の『六格前編』でも用い続けられたということである。また、ほかの蘭語学資料にも「副詞」の訳例が見受けられるが、詳しくは下表に示されるとおりである。

2) 信原継雄. 『清語文典』. 1905. 青木高山堂. 1905. p69

3) 石山福治. 『支那語文法』. 文求堂. 1908. p 2

4) 宮錦舒. 『最新言文一致支那語文典』. 文求堂. 1912. p182

5) 啊慶徒. 『北京官話文法・詞編』. 文求堂. 1919. p193

6) 宮脇賢之介. 『北京官話支那語文法』. 大阪屋号書店. 1919. p52

7) 杉本つとむ. 『日本語研究の歴史』. 八坂書房. 1998. p379

表5 蘭語学資料における「副詞」の使用

書名	訳語	編者、訳者	刊行年次
訳文必用属文錦囊	副詞	吉雄権之助	文化9年
六格前編	副詞	吉雄俊蔵	文化11年
和蘭文典字類	副詞	飯泉士讓 高橋重威	安政3年
窩蘭麻知加訓訳	副詞	小川玄龍	安政3年
訓点和蘭文典	副詞	総撰館	安政4年

安政4年(1857)となると、洋学の中心が蘭学から英学へと移っていくにつれて、「副詞」は相次いで出版された英語の学習書、及び英文典の訳書にも採られていった。文久2年(1862)刊行の『英和对訳袖珍辞書』では、「adverb」の訳語は「副詞」である。開成所版『英吉利文典』の字類や訳書でも、「adverb」は「副詞」と訳されている。ほかにも、『洋学指針』(1867)、『英文典直訳』(1871)、『英文典便覧』(1871)でも同一の訳語が採用されている。

明治期に入り、洋文典を規範にした洋風日本文典が数多く編纂された。「副詞」という訳語もこれらの日本文典に採り入れられ、次第に品詞名として日本語文法に固定化した。

表6 明治前期の日本文典における「副詞」の使用

書名	品詞名	編著者	刊行年次
大倭語学手引草	副詞	中金正衛	明治4年
日本小文典	副詞	黒川真頼	明治5年
山田氏文法書	副詞	山田俊三	明治6年
小学日本文典	副詞	田中義廉	明治7年
日本文典	副詞	中根淑	明治9年
小学科用日本文典	副詞	春山弟彦	明治10年
日本詞学入門	副詞	旗野十一郎	明治11年
語学訓蒙	副詞	加部厳夫	明治12年
日本文法	副詞	阿保友一郎	明治15年
日本小文典	副詞	物集高見	明治16年
語法指南	副詞	大槻文彦	明治23年

要するに、「副詞」が文法用語として中国語文法書に使用されるようになるまで、蘭文典に起源、英文典に継承、日本文典に定着という流れを経たのである。

また、中国人研究者の著述に於いて、「副詞」という術語が最初に見えたのは章士釗の『中等国文典』(1907)である。つまり、章氏の『中等国文典』に先んずる30年、「副詞」は既に日本人研究者により中国語文法の記述に応用されたのである。

2.2 非否

「非否^{ウチケン}」は『文学書官話』における「折服言」の和訳語である。「折服言」の定義は下記の通りである。

折服言一類的話就是、不、沒、未、勿、否。這樣的話、能屬形容言、數目言、加重言、靠托言、幫助言、隨從言、顛倒他的意思。

這個房子不好、勿罵人、我沒有錢、未曾過海、明天必下雨否⁸⁾

例語から分かるように、「折服言」は今現在で言う「否定副詞」に当たるものである。

原書の解釈に対して、大槻は「有ルヲ無シト打消シ然るヲ然ラズト反ヘス如キ総ベテ他ノ言ノ意味ヲ顛倒スルコトナリ」⁹⁾と注記しているが、「折服言」に対して、打消しを表す機能に基づく訳語を与えただけで、「副詞ノ一部」とは見做していない。

村上本では、「折服詞又否説詞ハ能ク形容詞數目詞加重詞動詞助動詞副詞ニ屬シテ其意思ヲ顛倒スルモノナリ」¹⁰⁾という解釈が記されているが、村上は「言」を「詞」に変えただけで、これといった訳語を与えていない。

2.3 副形容詞、副動詞、打消言

宮島吉敏の『支那語語法』では、副詞は、「副形容詞」、「副動詞」、「打消言」といった三つの品詞部門に分属している。

副形容詞 形容詞ニ隨從シテ意味ヲ強メ或ハ其程度ヲ示スモノヲ謂フ

例：這兒的景致實在可愛、這點兒禮太薄、這件事很掣手、婦女們裹脚是最壞的風¹¹⁾

副動詞 動詞ニ隨從シテ其意義ヲ名狀スルモノ

例：還、都、豈、剛、才、又、必、已經、索性、忽然¹²⁾

打消言 名詞、代名詞、形容詞、動詞、助動詞、副詞ニ隨從シテ其意味ヲ否定シ或ハ反對トナス語

例：他做事不麻利、我和他沒有交情、你別當作耳旁風¹³⁾

以上の説明及び具体例を見れば明らかになるように、「副形容詞」、「副動詞」、「打消言」とはそれぞれ、形容詞を修飾するもの、動詞を修飾するもの、打消の意を示すものであり、何れも機能を基に付けられた名称と判断できる。

2.4 疎状詞

米田祐太郎の『支那語文法研究』だけ、「疎状詞」を副詞の名称として用いている。しかしこれは著者

8) Tarlton Perry Crawford・張儒珍. 『文学書官話』. 出版者不明. 1869. pp30-31

9) 大槻文彦. 『支那文典』 坤卷. 大槻文彦. 1877. p12

10) 村上秀吉. 『支那文典』. 博文館. 1877. p57

11) 宮島吉敏. 『支那語語法』. 干城堂. 1921. p54

12) 宮島吉敏. 『支那語語法』. 干城堂. 1921. pp154-155

13) 宮島吉敏. 『支那語語法』. 干城堂. 1921. pp228-229

自身による命名ではなく、1920年に出版された中国人研究者、陳浚介の著『白話文文法綱要』に拠られたものである。証拠として、『白話文文法綱要』では、「名物詞」、「称代詞」、「区別詞」、「動詞」、「疎状詞」、「助詞」、「連接詞」、「感発詞」の8品を立ており、『支那語文法研究』では品詞名として「名物詞」、「称代詞」、「区別詞」、「動詞」、「疎状詞」、「助詞」、「連詞」、「嘆詞」を使用している。品詞名の類似性からも『白話文文法綱要』の影響が窺える。

3. 副詞の下位分類

日本人研究者は形式、意味の両面から、副詞を幾つかのグループに分け、グループごとに数多くの具体例を掲げている。これまでの調査によれば、日本人による副詞の下位区分の仕方は概ね明治前期の日本文典における副詞の下位分類の枠組を規範にしているものである。以下では詳細に説明していく。

3.1 形式による分類

信原継雄の『清語文典』（1905）で、副詞はその形式により下図のように類別されている。

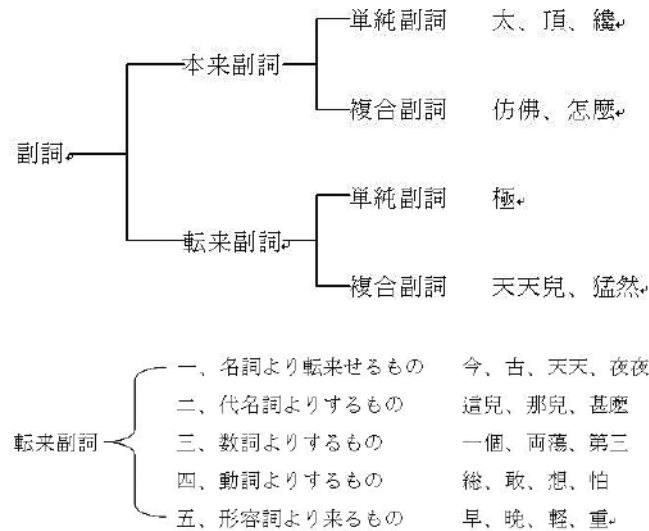


図2 『清語文典』における副詞の下位分類

信原はまず副詞を、元々副詞として用いられる「本来副詞」と、他詞より転じ来る「転来副詞」に大別し、それから更に単複の2種に分けている。「単純副詞」とは、一文字からなる単音節語であるのに対して、「複合副詞」は二文字以上の複音節語である。

尚、「転来副詞」はそれが如何なる品詞から転来したかによって更に細分類されている。「名詞より転来せるもの」には「今」、「古」のような元来名詞であるもののほか、「天天」、「夜夜」のような名詞の重ね型の例も見える。「代名詞よりするもの」には、指示代詞の「這兒」、「那兒」、疑問代詞の「甚麼」が含まれている。「数詞よりするもの」には序数詞の「第三」もあれば、数量構造の「一個」、「兩蕩」もある。「動詞よりするもの」のたぐいに、時間副詞の「総」、語気副詞の「怕」、「敢」などが挙げられている。「形容詞より来るもの」は「早」、「晚」、「輕」、「重」といった形容詞から副詞に転用されるものである。

『清語文典』のほかに、啊麼徒の『北京官話文法・詞編』でもよく類似した分類法が行われている。

表7 『北京官話文法・詞編』における副詞の下位区分

下位分類		例語
本来副詞		還、都、既、豈、竟、另、剛、纔、更、凡、又、必、只、乍、或、就、已、好在、寧可、索性、忽然、儘自、敢情、倘或、可就、即或、自然而然
転来副詞	名詞ヨリ来レルモノ	天天兒、家家兒、人人兒、年年兒
	形容詞ヨリ来レルモノ	白耽誤工夫、大不以為然、我老等著他來哪、直想不出好法子、好容易才卒業了
	動詞ヨリ来レルモノ	怕他走漏了風聲、總免不了、這麼辦越好、專為的是過日子
	数詞ヨリ来レルモノ	一查看就查出來了、鬧了一場、哭了一聲、他再三的來找我都沒在家、一個個的拿出來
合成副詞		拼命的死戰了、何苦還要與敵國爭勝呢、差一點兒把命送了、同心協力的辦、低聲下氣的說、咬牙切齒的拍桌子
形容副詞		快跑、慢走、早起來、晚回來、快快兒的藏起來、我要重重的謝您、輕輕兒的把東西接過去、這明明白白的是叫人殺的、穩穩當當的走了二百四十海裡

上表に示されるように、副詞はその構成により「本来副詞」、「転来副詞」、「合成副詞」、「形容副詞」の4種に分類されている。「本来副詞」の例語は主として語気副詞で、ほかに時間、範囲、反復、様態等を示す副詞も入っている。「転来副詞」はまた名詞、形容詞、動詞、数詞より転じるものに再分類されている。

「名詞ヨリ来レルモノ」は全て名詞の重ね型が副詞として使われるものである。「形容詞ヨリ来レルモノ」に挙げられた「白」、「老」、「直」は同音同形とはいえ、定語になる時と状語に用いられる時、意味も機能も異なるので、現行の中国語文法では、これらの語は既に二語に分化したものとされている。「数詞ヨリ来レルモノ」に、「鬧了一場」、「哭了一聲」というような、補語の働きをする数量構造の例が見える。「合成副詞」の一類には、「拼命」、「何苦」等の複合語のほか、「同心協力」、「低聲下氣」、「咬牙切齒」といった四文字熟語に「的」を付け加えることによって状語として用いるものも入っている。「形容副詞」の場合、「快」、「慢」、「早」、「晚」等、形容詞を副詞として使用されるもの以外、「快快兒的」、「重重的」、「輕輕兒的」、「明明白白的」、「穩穩當當的」というように、形容詞のAA式重ね型とAABB式重ね型の後に「的」を添えることで副詞に転用されるものも例に掲げられている。

上掲の分類法は実際に、早くから明治前期の日本文典では既に行われていたのである。以下では、田中義廉の『小学日本文典』（1874）、春山弟彦の『小学科用日本文典』（1877）を例に、当時の日本文典において、副詞をその成立からどのように下位分類しているかを示しておく。

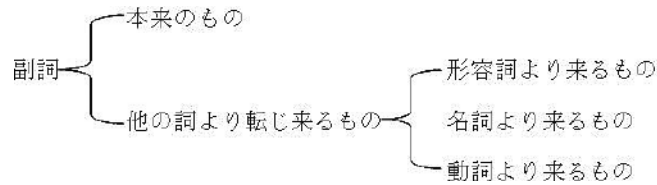


図3 『小学日本文典』における副詞の形式に基づく下位分類

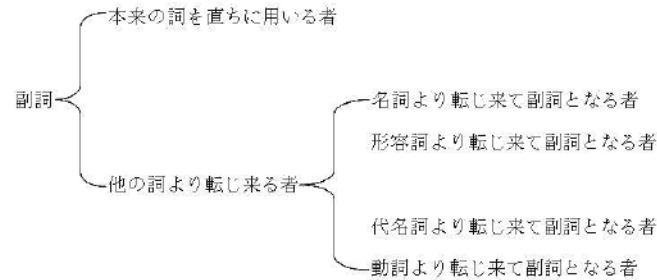


図4 『小学科用日本文典』における副詞の形式に基づく下位分類

上図に示されているように、副詞をまず「本来」と「転来」の2種に分け、それから転来副詞を更に名詞、代名詞、形容詞、動詞などからくるものに細分類するという下位区分の仕方は明治前期の日本文典には既に現れている。日本人研究者らは明らかに日本文典における副詞の下位分類の枠組に準拠しているが、それが単なる模倣ではなく、中国語の副詞の性格に合わせるために、ある程度の補足と改変も行っている。

3.2 意味による分類

石山福治の『支那語文法』(1908)では、副詞はそれが言い表す意味によって以下のように下位区分されている。

表8 『支那語文法』における副詞の下位分類

下位分類		例語
単純副詞	時ノ副詞	起初、以前、以後、將來、向來、従前、往後、後來、現在、這回、那回、下回、近來、這個時候、那個時候、今天、後天、明天、昨天、前天、早、晚、常、老、就、快、剛才、先、後、早已、已經、既
	場所ノ副詞	這兒、那兒、外頭、裡頭、前頭、後頭、前邊兒、後邊兒、右邊兒、左邊兒、中間兒、旁邊兒、各處、各地方兒、上頭、底下、東邊兒、南邊兒、西邊兒、北邊兒
	数ノ副詞	一次、屢次、迭次、再、兩回、三蕩
	状態、性質及ヒ事柄ノ副詞	這麼、那麼、俱、皆、專、決、只、竟、就、惟、一定、必、正、真、實在、恰巧、偏巧、幸而、幸虧、好在、忽然、突然、偶然、果然、誰知道、本來、橫豎、左右、勉強、好像、仿佛、恨不得、怪不得、互相、彼此、白、仍舊、自然還、難道、索性、總、該、務必、特意、敢、往往、隨便、恐怕、一直、趕緊、快快的、慢慢的、好好的
	分量及ヒ程度ノ副詞	幾、幾乎、一點兒、少、多、極、很、頗、甚、慌、最、頂、好、太、全、都、總、略、約、大概

承認拒否ノ副詞	是、不、不是、非、沒、無、莫、莫非、莫不、莫若
疑問副詞	何、那兒、多啫、怎麼、為什麼、幾、多少
關係副詞	就、纔、再、其次、一來、二來、而且、卻、究竟、到底、然後、然而、也

石山はまず副詞を「単純副詞」、「疑問副詞」、「關係副詞」に分け、それから「単純副詞」を更に「時ノ副詞」、「場所ノ副詞」、「数ノ副詞」、「状態性質及ヒ事柄ノ副詞」、「分量及ヒ程度ノ副詞」、「承認拒否ノ副詞」の6項に分別している。

「時ノ副詞」には、時間副詞と、時間名詞から転来されるもののほか、「這個時候」、「那個時候」というように、指示代詞の「這」、「那」が量詞「個」と共に定語となり、後の名詞「時候」を修飾する定中構造も含まれている。これは明らかに品詞論レベルの概念と統語論レベルの概念を混同したことによるものである。「場所ノ副詞」にも、単純方位詞と接尾辞の組み合わせによる合成方位詞の例が見えるが、「頭」を構成素とするものに限らず、「前邊兒」、「右邊兒」、「旁邊兒」、「東邊兒」というように、単純方位詞が接尾辞の「邊」と結合して合成方位詞となるものもある。そのほか、方位フレーズ「底下」なども中に入っている。「数ノ副詞」の項に、重複や頻度を表す副詞「屢次」、「再」と、回数を示す数量構造「一次」、「兩回」、「三蕩」が例として掲げられている。「状態性質及ヒ事柄ノ副詞」は主として語氣副詞から構成されている。それ以外、性状についていう指示代詞「這麼」、「那麼」、範囲副詞「皆」、「只」、「惟」、「俱」、時間副詞「突然」、「忽然」、「就」、様態副詞「互相」、「隨便」、それに、「快快的」、「慢慢的」、「好好的」等の形容詞のAA式重ね型に「的」を添えて副詞に用いるものも挙がっている。「分量及ヒ程度ノ副詞」に程度副詞と範囲副詞の例のほか、常に述語の後に置かれ、補語の役割を担う程度副詞「極」、「很」、「多」も含めたのは初めてである。「承認拒否ノ副詞」には「是」、「不」、「不是」、「非」、「沒」、「無」、「莫」等の肯定と否定を表す副詞が入っている。

石山は「疑問副詞」を下位区分せずに挙げているが、中には人、事物を問う「何」、場所を問う「那兒」、数量について尋ねる「幾」、「多少」、時間を問う「多啫」、性状方式を問う「怎麼」、原因を問う「為什麼」等の疑問代詞が込められている。これらの疑問を表すものを一括りにして「疑問副詞」と扱ったのは、やはり意味だけに注目し、文法機能を考慮に入れなかったためである。

最も注目に値するのは、「關係副詞」の定立である。副詞には、語句と語句の関連を示すものが存在する。このようなものを「關係副詞」と命名し、副詞の一下位類として扱ったのは石山だけである。但し、この類の副詞は文中において一定の接続作用を果たす点では、連詞と同様な働きをする上に、連詞と呼応させて使い、何らかの関係を表すこともあるため、時として両者の区別を明確につけられない場合がある。石山が「關係副詞」に列挙したのものにも幾つかの連詞が混入している。

宮錦舒の『最新言文一致支那語文典』では、以下のような下位分類法が示されている。

表9 『最新言文一致支那語文典』における副詞の下位区分

下位分類	例語
普通副詞	時間二関スル副詞 我剛才吃了飯、還沒去哪、他常來這兒買東西、他老不改他的毛病、他起初明白的很、您再穿上一件衣裳就暖和了、快到年下了、咱們晚去罷、你到家立刻回來麼、您先走著我隨後就到、老爺早已起來了
	場所二関スル副詞 你在那旁邊兒坐下、他在我家的北邊兒開著個鋪子、掌櫃的上頭吃飯去了、晚上外頭熱鬧的很、樓上頭沒有樓底下寬綽、這屋裡中間兒不乾淨
	数二関スル副詞 我這是初次來求多照應、今天又下起雨來了、沒有比這個再好的了、這會比上回還快一點兒
	状態、性質及び事柄二関スル副詞 明兒我若不來後天準來、他是竟坐著玩兒不做活、我真吃飽了、您走的實在快我趕不上、那麼貴的東西他一定不買、咱們慢慢的走吧快到了
	分量及び程度二関スル副詞 他大概吃了飯沒有不來、行李都驗完了麼、這些貨各鋪子全短了、我今天很不舒服、昨天他吃的甚多、他寫字極快、學中國語口音頂難、他是最明白的人、你去更好了、離這兒有多遠、這個房子錢太貴、他過於糊塗
否諾二関スル副詞 是、是的、沒、不、不是、非、無、不然	
特別副詞	一天沒有事悶得慌、上野的櫻花好看極了、那座山高得很、這匹馬快得利害、今天冷得不得了、這個比那個好得多、我看您比他快多了、您的表比我這個表慢一點兒
疑問副詞	打那麼走好、今兒怎麼這麼熱啊、月亮為什麼還不出來、他多嚙上您那兒去了

まず、上表における「特別副詞」の存在は注目し得る点である。例示のように、「特別副詞」に含まれたものはほかの副詞とは異なり、全て動詞や形容詞の後に置かれ、補語として機能するものである。その中には、「得很」、「多了」、「極了」というような、程度副詞の「很」、「多」、「極」を構成部分とする程度補語もあれば、比較数量補語の働きをする「一點兒」のような数量構造もある。「特別副詞」は明らかに、副詞が述語に後続し、補語となる文法機能に基づいて案出された下位類である。宮錦舒による「特別副詞」の定立はそれ以降の研究者にも影響を及ぼしている。宮脇賢之介の『北京官話支那語文法』、米田祐太郎の『支那語文法研究』は共に「特別副詞」を取り上げ、それぞれ以下の例文を挙げている。

一天沒有事悶得慌、好得很、我乏得利害、忙得不得了、你比我快多了、好一點兒、那好極了¹⁴⁾
梅花好看極了、喜歡得不得了、今天冷得利害、今天比昨天暖多了、你比他跑的快得多、這表比你的快一點兒¹⁵⁾

以上の二書に列挙された例語が『最新言文一致支那語文典』のものと同じであることから見れば、「特別副詞」について、宮脇と米田はほとんど『最新言文一致支那語文典』に倣っていると言っても過言ではない。

次に、宮錦舒が「普通副詞」を更に「時間二関スル副詞」、「場所二関スル副詞」、「数二関スル副詞」、「状態、性質及び事柄に關スル副詞」、「分量及び程度二関スル副詞」、「否諾二関スル副詞」と分類した点において、『支那語文法』とはほぼ同様である。両者を照らし合わせれば明らかになるように、種別の名

14) 宮脇賢之介、『北京官話支那語文法』。大阪屋号書店。1919. p55

15) 米田祐太郎、『支那語文法研究』。大阪屋号書店。1922. p105

称としては、かなりの部分に同じ表現を使っている。こうして見れば、宮錦舒が『支那語文法』を参照し、しかも有用な記述を採り入れたのは確実である。

ところが、以上のような分類の仕方にも明治期の日本文典の影響を受けた跡が窺える。

田中義廉の『小学日本文典』（1875）では、副詞はその意味の差から、「地位副詞」、「時刻副詞」、「反復副詞」、「順序副詞」、「分量副詞」、「状態副詞」、「決定副詞」、「否不副詞」、「種分副詞」、「併合副詞」、「推量副詞」、「疑問副詞」「発語副詞」という13類に分けられている。類似の取扱いはそれ以降の日本文典でも行われている（下表を参照）。

表10 明治期の日本文典における副詞の意味に基づく下位分類

書名	編著者	副詞の下位分類
小学科用日本文典	春山弟彦	位地、時刻、反復、順序、分量、状態、決定、否不、種分、併合、推量、疑問、解説
日本文典	中根淑	作為、地位、時刻、分量、決定、非否
日本文法書	藤井惟勉	位地副詞、時刻副詞、反復副詞、順序副詞、分量副詞、状態副詞、決定副詞、否不副詞
小学文法書	中島操	数次副詞、順序副詞、位置副詞、時刻副詞、分量副詞、状態副詞、推量副詞、決定副詞、否不副詞、併合副詞、反復副詞、発語副詞、殊分副詞

この時期の日本文典における「副詞」の下位分類は概ね田中の説を踏襲しているものである。しかしながら、この分類の枠組は田中義廉自身による考案ではなく、『和蘭文典前編』の訳書『訳和蘭文語』（1856）に拠られたものである。『訳和蘭文語』における「副辞」の下位分類は下図のようである。



図5 『訳和蘭文語』における「副辞」の下位分類¹⁶⁾

16) 大庭雪斎. 『訳和蘭文語』前編：卷之中. 秋田屋太右衛門. 1856. pp69-70

上図から分かるように、田中をはじめ、明治前期の日本文典の編述者らは『訳和蘭文語』における訳語を数多く採り入れ、日本語文法の記述に活用している。要するに、意味に基づく副詞の下位分類の枠組は、蘭文典に起源し、日本文典を経由して、中国語文法書に受け継がれたものであることが判明した。

4. 終わりに

以上、名称と下位分類の二面から、明治・大正期に刊行された中国語口語文法書における副詞の捉え方について考察を加えた。

まず、副詞の名称について、ほかの資料文献から借用されたものもあれば、研究者自身によって案出されたものもある。「副詞」は、本来蘭語「bijwoorden」の和訳語で、吉雄権之助の『訳文必用属文錦囊』で初めて取り上げられた。「副詞」はそれ以降の和蘭文典や英文典の訳書にも受け継がれ、更に洋文典を規範にした明治前期の洋風日本文典にも採り入れられたのである。「副詞ノ一部」、「非否」はそれぞれ『文学書官話』における「加重言、随従言、示處言」と「折服言」といった品詞名に対して、大槻文彦によって当てられた訳語である。大槻文彦の『支那文典』は「副詞」という術語を中国語文法の記述に応用した最も早い文献で、章士釗の『中等国文典』より30年早かった。宮島吉敏の『支那語語法』における「副形容詞」、「副動詞」、「打消言」は副詞の機能を基に付けられた名称で、それぞれは形容詞を修飾するもの、動詞を修飾するもの、打消の意を示すものを指し示す。『支那語文法研究』で用いられた「疎状詞」は1920年に出版された陳浚介の著『白話文文法綱要』から引き入れた術語である。

次に、副詞に対する下位分類は、形式と意味を基に行われている。形式による場合、信原、啊麼徒に代表される研究者は、副詞をまず「本来」と「転来」の2種に分け、それから転来副詞を、更に名詞、代名詞、形容詞、動詞などから転用するものと細分類するという下位区分の仕方を探っている。これは明治期の日本文典における副詞の形式に基づく下位分類の枠組を範式にした結果である。意味による場合、時間の副詞、場所の副詞、数の副詞、分量の副詞、状態の副詞等のように細かく分けられたのも、『訳和蘭文語』（1856）に準拠した明治前期の日本文典における意味に基づく副詞の下位分類の項目を部分的に撰取したものである。但し、石山福治による「関係副詞」の定立はこれまでにない創案で、宮錦舒による「特別副詞」の定置はそれ以降の研究者に影響を及ぼしている。

以上の考察を通して明らかになるように、日本人の副詞論における日本文典からの影響は主として「副詞」という術語の使用と副詞の下位分類の仕方の二面に現れている。「副詞」は蘭文典に起源、英文典に継承、日本文典に定着という流れを経て、最終的に中国語文法の記述に応用されたものである。副詞の下位区分に用いられた二種の分類法にも日本文典から影響を受けた跡が見られるが、形式による分類法は直接に『小学日本文典』における田中義廉の説を踏襲したものであるのに対して、意味による分類法は『訳和蘭文語』に起源し、日本文典を経由して、中国語文法書に受け継がれたものである。